店頭から「こんにちは」 第18回

音楽で心をキレイに 聴くことも未病対策に

心の病がある方や、脳に障がいを持つ方、あるいは認知症のご高齢の方――。音楽を聴いていただくと、どうでしょう。その前後で、顔の表情には、あきらかに差があるのです。

演奏会終了後、志賀昭裕さん(写真右)、参加者の方々ともども、「はい、チーズ」

音楽は代替医療

「地酒は、クラシック音楽を流しながら醸造する」というお話を聴いて、ビックリ！

実際に、その地酒を味わってみると、「あっ、これがモーツァルトの味か」、はたまた、「ベートーベンの味は、これか」と。もちろん、科学的なエビデンスがあるとは思えません。

ただ、先入観からかも知れませんが、美味しい気がしました。

さて、ヒトの場合は、どうでしょう？　もう何十年も前から、音楽療法の必要性が唱えられてきました。

世界保健機構（WHO）では、音楽を、聴くこと・歌うこと・演奏すること、すべて代替医療に分類しています。つまり、未病（※）の治療の範ちゅうに入るのです。

最近、病院などでコンサートが開催されているのも、未病対策といえるでしょう。

そこで、うちのお客さまにも、音楽を聴くことによって、「身も心も元気になっていただこう」と考えました。

笑顔なのに涙顔…

実は、日本でただ1人の、プロの男性アルパ奏者・志賀昭裕さんに、ミニコンサートをお願いしたのです。

志賀さんは、福島県相馬市出身。東日本大震災の後、全国ツアーの合間を縫い、津波の被害があった地域を、演奏してまわってきた方です。

ちなみに、アルパはハープの一種で、中南米の民族楽器。ラテンハープとも呼ばれています。有名な『コンドルは飛んで行く』という曲は、アルパのために作曲されたのだとか。

ともあれ、25人も入れば超満員の薬局店内で、生まれて初めて聴くアルパの音色。

ラテンの情熱的な曲が始まると、鳥肌が立つほどシビレました。爪で弾いての演奏は、ハープより力強く、お琴の音色にも似ています。

アルパで聴く日本の名曲の数々は、優しい音色で、感極まり、自然と涙が流れてきたものです。参加された方々は、みなさん、ニコニコ顔なのに涙顔。魔法にでもかかったようでした。

アルパのおかげで、心の中はすっかりキレイに――。

当日の写真を見るたびに、自然と笑みがこぼれてくることでしょう。

宮川薬局(宮城県仙台市)代表
薬学博士・薬剤師
宮川季士(みやがわとしじ)先生
プロフィール／1976（昭和51）年、東北薬科大学卒業。'78（同53）年、同大学大学院修士課程修了。'87（同62）年、薬学博士学位。
地域に根ざしたおクスリ屋さんとして、多くのファンが。

（※）未病とは、「未ダ病ニナラザル状態」。つまり、健康状態の範囲内であるものの、病気に著しく近い身体、または心の状態のこと。